

11月24日ルネ研報告（最終稿） 基盤的コミュニズムについて

2019年1月20日 榎原 均

最終稿へのはしがき

以前に公開していました改訂版に、致命的ミスがありました。それは、『資本論』初版本文価値形態論の第I形態の誤訳問題を論じたところで、久留間鮫造からの引用をしたのですが、その引用文に欠落があり、正訳と誤訳の取り違えがおこり、その後の文章でも誤訳の方にしたがって論議していたのです（8頁）。

読者から指摘があり、校閲したところ、誤りに気づきました。商品Aが、商品Bを自分に等置する、という読みが正訳で、商品Aが、商品Bに、自分を等置する、というのが誤訳の方です。私は、お金の絵本プロジェクトをやっていた関係で、ずっとこの両者の違いを言葉で表現しようとしていて、ずっと悩んでいました。引用文の欠落によって、正と誤の取り違えをしても気づかなかった理由は、この言語表現での区別こだわっていたところにあったようです。要するにA=B、という価値関係をどう読むかなのですが、正訳は、AはBに等しい、と表現でき、誤訳の方は、AはBである、と表現できるのですが、この違いは形式的には区別がつかないのです。しかし、内容的に見れば、正訳の方は、AとBという異なる使用価値の間にある共通なものを予想させますが、誤訳の方は、AとBという使用価値そのものの同等性を表現していて、形容矛盾に陥っているのです。このような次元での区別が必要だと理解できた次第です。

なお、訂正のついでに、酒井隆史さんと植村邦彦さんからの引用文を、『情況』2019年冬号が発行されたので、それに合わせました。

また、最後に、「商品という社会的象形文字を読む」の最新バージョンをつけました。この間色々修正したりしていましたが、当分、これでいきたいと考えています。

はじめに

当初は、若森章孝・植村邦彦著『壊れゆく資本主義をどう生きるか』（唯学書房、2017年11月）を取り上げる予定であったが、オルタナティブな社会構想について担当している若森の問題意識は、「21世紀の社会民主主義」の解明であり、グレーバー『負債論』への言及はあるが、基盤的コミュニズムについては触れておらず、負債がもたらす道德への批判と債務帳消の正当性ということしか述べていない。

それで予定を変更して、関西大学で4月27日に行われた酒井隆史を招いたシンポジウムの記録を素材にして、グレーバーが提起している基盤的コミュニズムについて報告したい。シンポジウムは、酒井隆史がグレーバーの基盤的コミュニズムについて報告し、これに若手の研究者二人がコメントする仕方で企画され、終了後『情況』誌に掲載しようと文字起こしし、植村さんにも書いてもらってシンポジウム全貌の雑誌掲載を提案していたが、大下編集長が亡くなったこともあり、一時期宙に浮いていた。しかし、新規『情況』3号目となる2019年冬号に掲載されることになり、酒井隆史の報告、浜田明範のコメント、北川恒太の感想、植村邦彦のまとめた論文をすでに入稿した。これらの論文はグレーバーの基礎的コミュニズム論を活かしてそれぞれがその展開を試みたものであり、若森説を取り上げるよりも、こちらの紹介の方が、本日の報告にはふさわしいと考える。

第1. グレーバーの基盤的コミュニズムとは何か

酒井隆史の報告は雑誌『nyx』第5号の掲載予定の論文（すでに発刊されている）が事前資料として配布されていた。今回『情況』掲載論文は、これをリライトした部分が含まれているが、基盤的コミュニズム論はそれに該当している。（『情況』2019年冬号が発行され

たので、引用はそれに變更している。)

酒井はまず『情況』論文で、マルクスの『ゴータ綱領批判』の有名な共産主義の段階論に言及しそれとの関連で、グレーバーの基盤的コミュニズムについて次のように述べている。

「それでも、ここに問題があるとしたらなんでしょうか。まず、このマルクスのコミュニズムが『未来像』であることです。生産諸関係の桎梏から解放された生産力の増大が稀少性の論理を克服してはじめて拓かれる、ゆたかな社会を前提としていること、そして、その条件のもとではじめて『各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて』という論理が作動するといった展望であることです。すなわち、それが、『革命』のような出来事を通して、そしてその解釈はさまざまでしょうが『プロレタリア独裁』のような過程を経て、たとえば生産手段の共同所有がより深化する社会において、はじめてはたらく論理ということなのです。

それに対して、グレーバーは、『各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて』は、直接にコミュニズムの論理である、といいます。グレーバーによれば、コミュニズムとは未来像ではなく、わたしたちの日常にすでに存在し、それだけではなく、わたしたちの日常の基盤をなしているなにかなのです。だからグレーバーは、みずからのいうコミュニズムを「基盤的コミュニズム」と表現します。それは現実内に内在して、現実のうちで作動している論理、わたしたちが日常生活を営むなかですでに作動しているモラルの原理、しかも、社会そのものを成立させている論理なのです。身の回りをみわたしてみましょ。家族はもちろん、友人、そして職場さえも、そのかなりの部分が、『能力に応じて、必要に応じて』の論理で動いていることがわかります。資本主義の最先端の企業においてさえも例外ではないのです。ペンの貸し借りやコピーをとること、身内の不幸の欠勤の穴埋めをすること、こうした営みが、いちいち決済可能なやりとりを通しておこなわれているわけではないのですから。」(『情況』2019年冬号、131～2頁)

ここでまず確認しておくべき点は、マルクスがコミュニズムを未来社会として構想したのに対してグレーバーの基盤的コミュニズムはいつの時代にも存在していた人間生活の基盤として捉えられているという点である。

このグレーバーの見解は、彼の独創ではなくて、人類学特にモースの研究に示唆を得たものだとことを確認したうえで、酒井は次のように述べている。

「すなわち、ここにみられるやりとりは、小さな心の貸借対照表にすら記載されないものです。くり返しになりますが、ここでは商業的交換と区別されたかぎりでの贈与が問題にされているのではない、という点に注意をしてください。贈与は、交換とコミュニズム(そしてヒエラルキー)をまたいでいるのであり、それが遅延されているとはいえ、あるいはときに派手な自己破壊のみぶり(ポトラッチ)をとる場合もあるとはいえ、それが対価の期待のなかにあるかぎり、交換の原理で動いているのです。グレーバーは、モース以降の「互酬性」の概念をめぐる混乱をあとづけながら、互酬性という概念それ自体のあやふやさを指摘し、互酬性の概念を開いた互酬性と閉じた互酬性に区分すべきという提案をしています。贈与は「全体的給付」という概念とは厳密に区別されたうえで、全体的給付はここでいう『開いた互酬性』に対応する、オープンエンドの「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて」の定式上にあるとされるのです。グレーバーがモースから導出する『個人主義的コミュニズム』とは、このように、コミュニズムの意味を、集团的所有からミニマムな義務の原理に、そして社会的関係の創造の原理に転換することから、ひきだされてくるのです。」(同書、137～8頁)

ここで互酬性の概念の危うさについて、酒井は、コミュニズム、交換、ヒエラルキー、三者の関係の問題として、グレーバーの新しい論文を引き合いに出して次のように述べている。

「この議論については、フランスの『反功利主義』を掲げる学際的雑誌『MAUSS』誌に発表された論文で、『負債論』第五章における原理論が、モースに引き付けながら明確に論じられています。そこでは、モラルの三原理について、『負債論』本文ではあまりみえな

ったモースの存在が、はっきりと表現されているのです。興味のある方は、ぜひ参考になさってください。

さて、ここでは余裕はないので、グレーバーが理論的基礎にすえるコミュニズム、交換、ヒエラルキーの三つのモラルの原理の区分の詳細については、『負債論』第五章にまかせて、ややあらっぽくまとめておきます。

まず、贈与とは、モースにおいて、互酬性も市場交換もそのうちに内包される交換の論理と、等価物の交換に還元できないコミュニズム、そして交換よりも「先例の論理」で作動するヒエラルキーをまたがってある現象なのです。ここでのポイントは、交換とコミュニズムをはっきりと峻別することにあります。そして、贈与現象は、この二つの論理によって大きく位相を変えるのです。」(同書、134～5頁)

ここで酒井が述べている、コミュニズム、交換、ヒエラルキー、三者の関係の問題はシンポジウム参加者の問題意識を刺激したようである。あとで見るように、植村は終了後に書かれたまとめた論文でこの問題に関連して新しい論点を提出している。

では、基盤的コミュニズム論による新たな社会変革論はどのようなものとなるだろうか。この点について酒井は次のように述べている。

「それでは、このようなコミュニズムの認識の転換が、わたしたちのこの社会の変革の構想になにを意味するのでしょうか？」

まず、変革の問題を、トータルな切断としてイメージする必要がなくなります。といっても、これは改良主義ではありません。むしろ根源的な変革をトータルな次元とむすびつける、これまでの常識的な考えをしなくてすむということなのです。ここで革命という理念をもって来るならば、わたしたちは、革命という理念を手放すことなく、それを政治の次元におけるトータルな転覆—権力奪取や政府の支配、政治における多数派の獲得—と考えなくてすむということです。グレーバー自身は、革命について、『大変動』といった『事象』とみなすことをやめるよう提案しています。こうした革命の切断的イメージはまた、国家や社会といった『想像的全体』の想定に由来しているのであって、このイメージを手放すということは、国家や社会についての想定そのものの変更を必要とすることになるでしょう。」(同書、142頁)

「かれの提案はこうです。革命を大変動とみなすことをやめて、『革命的行動とはなにか?』という問いを發するべきである、と。『そうすればわれわれは、革命的な行動とは、権力と支配の特定の形態を拒絶し、それに立ち向かいつつ、社会関係を(その集団の内部からさえ)再構築する、あらゆる集団的な行為である、といえるだろう。革命的な行動は、必ずしも政府を転覆することをめざす必要はない。権力を目前にして……自律的共同体を創造する試みは、まったく革命的な行動と定義しうるのだ。そして歴史が示しているように、こうした行動の継続的な積み重ねは(ほとんど)すべてを変革してしまうのだ。』

このような視座の転換は、国家の想像力のもとに制約され、国家的なものをしばしばよりグロテスクな形態で再生産していた革命を、そのくびきから解放することにもなるでしょう。」(同書、143頁)

このようなグレーバーの社会変革論は、私が主張してきたソ連崩壊の原理的根拠とそれに基づく、貨幣生成を不必要とする交易関係を迂回して創り出すという内容と親和性がある。ところで問題はこれにとどまらず、さらに先に進んでいく。植村の問題提起の紹介に移ろう。

第2. 贈与と分かち合いの区別、植村邦彦の提起

植村邦彦は、シンポジウムの後、それをふりかえって論文「贈与と分かち合い——グレーバー『負債論』をめぐって」を書いた。イヌイットの分かち合いに注目したこの論文は次のような趣旨である。(なお、引用文には『情況』の頁を追記した。)

「この逸話(グレーバーが提示しているイヌイットの分かち合いの例)は示唆的である。

『資本主義の終わり』が始まった現在、『贈与経済』の再評価は一種の知的流行になっていて、贈与経済は市場経済あるいは商品交換と対比される形で肯定的に評価されることが多い。しかし、『贈与は奴隷をつくる』という言葉が意味しているのは、贈与はそれを受け取った側に『お礼』を述べることを強いるのであり、そのような『負債=負い目』の感情が支配従属関係をも生み出すことになる、ということである。

つまり、少なくともグリーンランドのイヌイットにとって、『贈与』と『助け合い』は厳格に区別しなければならないのであり、『助け合い』を維持するためには、贈与に対してお礼を述べるような関係そのものを拒否しなければならないのである。」(『情況』2019年冬号、156~7頁)

そしてモースの贈与論の分析から「第三項排除」を指摘した今村仁司の説の紹介へと進む。

「今村は、この『スケープゴート・メカニズム』が『神』という観念を生み出すことの意味を、次のように説明している。『「神」観念は、社会形成の論理に即して考えるかぎり、共同体の起源にある犠牲者の肉と霊にある。……スケープゴートが全員一致と全員参加の下にいけにえにされることが、原初的な『神格』の発生のメカニズムであり、スケープゴートが『神』となり、それを喰うことで人も聖なる空間に関与することが可能になる。現実的な起源の具体的証拠は、日本史のなかで見つけることはもはや不可能であろうが、『一味神水』の儀礼の身振りを見れば、スケープゴート儀礼の筋道だけはみごとに保存されている』(『排除の構造』、189頁)。(同書、159頁)

植村の提起は、先ほどのイヌイットの例で言えば、野生動物が「スケープゴート」として「神」となり、それを共に食することで共犯者となったイヌイットの人びとの内部では、「平等主義」と「助け合い」が神から与えられた規範として機能する、ということである。」という点にある。ではこの問題提起を近代社会の分析に活かせるのだろうか。

「しかし、このような『第三項排除』が行われるのは、狩猟社会や歴史的過去(中世の日本)に限られるわけではない。今村によれば、『第三項排除』は『どんな社会形態も必ず通過する』(今村[1992]109頁)ものであり、近代社会も同じ論理に支えられているのである。『極端な図式化をあえておこなうなら、人類の経済活動は二つの対照的構図をもつ。ひとつは、スケープゴート効果を贈与経済形式で処理する構図であり、もうひとつは、スケープゴート効果を商品・貨幣・資本の形式で処理する構図である。贈与(ドン)と交換(エシジャンジェ)とは、根本的に異質の経済形式である。したがって、第三項排除=スケープゴート効果の発現形態も全く異なる』(同書、190頁)。

今村は、『近代貨幣が、ほとんど結晶化された形での第三項排除効果を実現している』(同書、109頁)と述べている。しかし、グリーンランドの野生動物や北海道の『カムイ』とは違って、近代の『神』である貨幣が私たちに『分かち合い』を命じているわけではない。それが助長しているのは、むしろ『所有的個人主義』である。それでは、私たちが互いに分かち合い、助け合う社会を再構築するためには、何が必要なのだろうか。」(同書、160頁)

ここで植村は、古代社会での第三項排除で形成された神が、共同体内部に分かち合いと平等を生み出すのに、現代の神=貨幣はそうではないことを指摘している。そして、共同体形成以前のバンド社会での交易を分析し、平等主義の起源について次のように述べている。

「このような脳科学や霊長類学の成果に従えば、『平等主義』や『分かち合い』として表現される『互酬性原理』は、霊長類のチンパンジー属とヒトとに本能的に備わった心的状態であり行動規範だ、ということになるだろう。したがって、現に存在する資本主義やそれを支える所有的個人主義は、人間の本源的な社会性からは逸脱した、ストレスの強い社会状態だということになる。そうだとすれば、私たちがそれを修復して、本来のあり方を回復することも不可能ではないはずである。」(同書、163頁)

分かち合いが人類に本能的に備わる心的状態から生じる社会的事態であるとしたら、バンドがより大きい共同体になった時に第三項排除という形で共同体内部での平等を実現し、そして現在の資本主義の次のシステムの設計にあたって、 Kommunismusの実現を、グレーバーの基盤的 Kommunismusの発想を生かしながら、なおも残る問題について植村は次のよう

に問いかけている。

「私たちにとっての問題は、大村の言うように『人類が対等な関係で結ばれた集団を生み出すためには、その対等な関係から外れた外部が必要である』(大村、116頁)のかどうか、ということになるだろう。つまり、人間には本源的な社会性があるとしても、一定の大きさをもつ共同体を形成するためには『第三項排除』は不可避なのか、ということだ。」(同書、164～5頁)

「いずれにしても人類学や歴史学は、人類が長い間、種としての動物的本性に従って、あるいはむしろ周到に配慮しながら、平等主義的な『共同体』を形成して『分かち合い』を続けてきたことを明らかにしている。そのような経験に学びながら、新しい『共同体』をこれからどのように再構築することができるのか、まだまだ考える余地がありそうだ。」(同書、165頁)

ここで植村は今村の「第三項排除」論を踏まえて展開しているが、人類学の知見からの「第三項排除」論はともかく、価値形態にそれを見る今村の見解はずっとおかしいと考えてきた。にもかかわらず今日まで批判できなかったが、シンポジウムでの議論に出会って、今やっと批判の糸口をつかめたようである。進んで今村説の批判に移ろう。

第3. 今村仁司の第三項排除論と価値形態論理解への疑問

はじめに

今村仁司の『暴力のオントロジー』(勁草書房)は、力と暴力、闘争と戦争といった人間社会の負の側面を、逸脱行為としてみるのではなく、社会形成とその運動の基礎にあるものと捉えて分析した好著である。そこで展開されている第三項排除は多くの人が受容している。

ところが、商品の価値形態から第三項排除を説明しているところで、今村は『資本論』初版本文価値形態論の引用をしているのだが、「を」と「に」の誤訳問題でかつて久留間が取り上げた論点が見逃されていて、誤訳とされている岡崎次郎訳(国民文庫版)がそのまま採用されている。つまり簡単な価値形態(第I形態)でリンネルと上着の等置の関係を、リンネルが上着「を」自分に等置するか、逆に、上着「に」自分を等置するか、という関係の逆転が誤訳によって生じているのだが、今村は誤訳の方にしたがって議論しているのだ。この点は、1980年代に今村の本を読んだ当初から気づいており、コメントとする必要性を感じていた。

しかし、コメントするには、簡単な価値形態の内容についての理解が必要で、これがなかなか一筋縄ではいかない。初版本文価値形態論については、それを交換過程論と通しで読むことで、商品からの貨幣生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によるということが読み取れ、これについては1980年代末に気づいていろいろ書いてきたが、しかし、簡単な価値形態で表示されている商品語を、マルクスが読解した部分は分かったようで分からず、そしてこれが分からなければ、誤訳への批判も久留間が指摘している文法上の問題としてしか提起できず、今村への批判も十分な形にはならないという思いがあって、これまで文章化をためらってきた。

最近はじめた「お金の絵本プロジェクト」で、『資本論』初版本文価値形態論で展開されている価値形態を、社会的象形文字として読み解くことを参加者たちと一緒に考える中で、なんとなく言語化できるような気分になってきて、いま改めて今村の価値形態論解釈への批判を始めている。

1. 今村暴力論の概略

今村はこの書全体の末尾で次のように述べている。

「現代の最も謎めいた謎とは、まさに暴力・闘争・死の存在以外にはあるまい。これを正面から攻めたて、その不可解な作用をあばき出してこそ、ようやくわれわれは、語の本来の

意味での『平和』を語るときを迎えることができるだろう。そのとき、貨幣・国家・権力、等々の暴力現象をのりこえうる希望の道をさぐりあてることができるのではあるまいか。」(『暴力のオントロジー』、勁草書房、241頁)

この意図は継承されるべきであろう。暴力をのりこえるとは国家の死滅の問題であり、資本主義から社会主義への過渡期の重要な政治的課題である。だからこそ、商品の価値形態の考察によって、市民社会生成の論理をたぐり、そこから暴力を位置づけようとした今村の問題関心は正当であった。では改めて今村の思考を追っていこう。

今村は、価値形態を取りあげた第3章 貨幣と暴力の前の、第2章 神話と暴力で、レヴィ＝ストロースの『アスディワル武勲詩』での神話解釈にもとづいて、人間社会に見られる次の二つの現象をあげている。第一の現象は、暴力の「相互性」であり、次のように述べられている。

「主体の対象化活動は、必ずメズューサの首のごとき物化の働きを相手に及ぼすのであるから、相互の内面的交流は原理的に閉ざされ、すさまじいまでの物化と支配の相互的応酬をおこなう他はないのである。」(今村、38頁)

次に第二の現象として、第三項排除が指摘される。

「第二の現象は、二項的相互性の維持のために、第三項が絶対的に排除される、という社会関係に根源的に内在する論理である。私はこの現象を『第三項』問題と名づけたい。第三項は、二項対立的関係(相互性)を維持したり、あるいは二項関係が危機におちいって回復を要求したりするときには、必ず運命的に発生する社会関係の根本動学を示唆する。第三項は、相互性の存立のために、つねに必ず、暴力的に抑圧され、排除され、あるいは殺害される。」(今村、29頁)

このように、今村は、第三項排除のアイディア自体は人類学の知見から導き出している。

「第三項の排除・抹殺がなければ、相互性(互酬性)がシステムとして存立・維持することができないのである。社会関係のシステム(相互性)がシステムとして閉じて自立するためには、社会関係を構成するメンバーが、一人を除いて、全員が一致して当の一人を殺害する、あるいは排除・抑圧することを至上命令とする、これが根本原則である。」(今村、38頁)

人類学の知見から導き出された第三項排除は、現在でも政治の原理の一つとして機能している。しかし今村はそれにとどまらず、商品交換の世界に第三項排除を見出そうとしたのだ。

「あたかも平和的なコミュニケーションとして進行する商品交換と流通の世界の平面に、否定しようもない根源的暴力の影を見定めること、これが次のテーマとなる。」(今村、40頁)

商品交換と流通の世界の平面に、根源的な暴力の影を見定めるといふ今村の目標は果たして実現したであろうか。

2. 今村の商品世界での根源的暴力論

今村は、第三章 貨幣と暴力でこの課題を次のように解決しようとしている。

「商品世界の論理は、市民社会の社会的人間関係の論理そのものである。あたり前のことを言うようだが、この点は大事なことである。商品関係が『ペテロ』と『パウロ』との人間関係と相同だということは、後にみるように、商品関係にふくまれている暴力の論理はそのままペテロ - パウロ関係に文字通りはねかえることを意味しているからである。商品関係は、マルクスがくりかえし指摘しているように、単なる物的関係ではなく、本質的に人間の社会関係であるという事態の生々しさは、暴力論的視点においては、ますます明確になって来るだろう。」(今村、60頁)

ここでの今村の推論は次の二つの命題設定から成り立っている。ひとつは社会的人間関係には、人類学の知見に基づく、第三項排除という暴力の論理を含んでいることである。そしてふたつめは、商品関係も人間の社会的関係である。ここから商品関係にも暴力の論理が含まれているに違いないという仮説を導きそれを証明しようとしているのだ。そしてこの

証明を『資本論』初本文価値形態論の論理に求めて次のように述べている。

「リンネル (A) はひとつの有用物 (使用価値) であるが、自分を『価値存在』にするには、フィヒテ的 $A=A$ ではどうにもならないので、自分を他の一商品 (上着=B) に自分の同類として関係させるのでなくてはならない。これが有名な『回り道』の論理である。この回り道によって、リンネル (A) の存在にどんな変化が生ずるのか。『リンネルは、他の商品に自分を価値として等置することによって、自分を価値として自分自身に関係させる。リンネルは、自分を価値としての自分自身に関係させることによって、同時に自分を使用価値としての自分から区別する。』(『資本論初版』からの引用…筆者)」(今村、60~1頁)

ここでの今村の引用した初版『資本論』が岡崎訳であり、久留間鮫造が誤訳であることを指摘している部分なのだが、この誤訳が導く論理に従って、今村は次のように結論づける。

「リンネル (A) と上着 (B) との関係において、関係を形成するイニシアティブは A にあり、B はつねにパッシヴである。相対的価値形態にあるものが能動的で等価形態にあるものは受動的である。B の『意志』にかかわりなく A は能動的に B に関係をつけることによって、自分の価値形態を現出させ、同時に、価値体と使用価値体へと自己分割する。ここには、商品の原始 - 分割、つまり商品の判断論がみられる。商品 A - 商品 B 関係のメカニズムは、構造的には、主体 - 客体の認識論的構造にひとしい。主体は、客体への関係を通して、我と自我とを自己分割する。自己分割は、判断としての自己反省である。単純な価値形態は、コギト - の作用構造とひとしく、したがって商品的社會関係は、コギト - 的はたらき (S-0)、つまり近代市民社会の論理を分泌する。この意味で、価値形態論は、資本制生産様式の原基的形態であることによって、近代市民社会で生きる人々の思考様式をいわば裏面から照らし出し、その社会的規定性をあばき出すことに役立つ。商品の論理は、単なる物の論理ではなく、物の関係に反射した市民的思考様式と行動様式の論理でもある。」(今村、61頁)

このように今村は、商品 A - 商品 B 関係のメカニズム、つまり、簡単な価値形態 (第 I 形態) を、商品 A が、自分を商品 B に等置すると読み、これが主体 - 客体の認識構造と等しいことを発見する。そして、デカルトのコギトを持ち出して、それと商品の価値形態との同型性を確認し、商品の論理に近代市民社会の論理を分泌する働きを見出している。そして、暴力の問題については次のように解明していく。

「価値形態の構造は、二つの位置の関連からなるが、この二つの位置の交替、すなわち相対的価値形態と等価形態との交替は、まさに暴力を伴う相互性の構造をつくりあげる。

相互性とは何についての相互性であるか、とつねに問わなければならない。A が相対価値を表現するために、B の意志に関わりなく、B の身体を借りる必要があるが、他者の身体を借りるとはひとつの暴力である。他者 (B) の身体を利用して A の価値を対象化することは、A の B に対する支配である。対象化 (物化) は、他者を物に還元するメデーサの首であり、暴力的支配である。A が B に対象化 = 物化的にかかわることは、さしあたりはまなざしによるかかわりであるから、このまなざしによって B は A にとっての、A の価値存在を映す鏡である。A にとって、B は鏡という物以外の何ものでもない。A は、対 B 関係のみならず、無限の列をなす他在にかかわるのであるから、A はこの世界のすべてを鏡にかえることができる。A と B、A と B 以外の世界との関係は、ただひとつの鏡化的関係、すなわち対象化 = 物化的関係しかありえない。そして対象化とは、たとえ視覚的对象化、観念的对象化ではあれ、つねに支配と暴力の関係である。」(今村、66頁)

今村は、相対的価値形態にある商品 A が、等価形態にある商品 B の意志に関わりなく、商品 B に自分を等置しているのだから、これは A が自分の価値を表示するために B の身体を借りたことになり、これはそもそも暴力支配ではないかと問っている。そしてこの A - B 関係に内在する暴力性を確認したうえで、第三項排除の仕組みを次のように説明している。

「商品的社會関係を安定させるためには、相互暴力関係を他の方向へずらさねばならない。暴力の互酬性を止揚して、全体の暴力圧力を一点へと集中することが、秩序解体の危機をのり切る唯一の方策である。商品的市民社会のメンバーたちは、共同して、ただひとつの商品を排除・除外して、すべての暴力をこれに集中する。」(今村、67頁)

今村によれば、商品世界での第三項排除とは、貨幣の生成のことである。そうすることで不安定な商品相互の関係が、安定するのだが、そのためには「商品的市民社会のメンバーたちは、共同して、ただひとつの商品を排除・除外して、すべての暴力をこれに集中する。」ことが必要だというのである。暴力とは意志行為であるが、このような今村の貨幣生成論からすれば、貨幣は人々が意識して創り出したものであり、排除の暴力によって生成されたものということになろう。アグリエッタ・オレルアンが同時期に『貨幣の暴力』で同様なことを主張していたが、これについてはすでにコメント済みである。以下を参照。

「悪貨が良貨を駆逐する—お粗末な貨幣論の横行—」

<http://www.office-ebara.org/modules/xfsection05/article.php?articleid=54>

3. 誤訳問題

では誤訳の問題に移ろう。久留間鮫造は次のように述べている。

「長谷部氏の訳では、『リンネルが価値としての上衣に自らを等置し、しかも同時にリンネルが自らを使用対象として上衣から区別することによって、上衣は、リンネル体に対立するリンネル価値の現象形態・リンネルの自然形態と異なるリンネルの価値形態・となる』(55～6頁)となっており、……。setzt sich den Rock gleich では、den Rock は四格であるから、『自らを上衣に等置』または『自らを上衣に等しとする』ではなくて、『上衣を自らに等置』と訳すべきであり、ihn als Wert sich gleichsetzt でも ihn(上着)は四格であるから、『価値としての上衣に自らを等置し』または『価値としてこの上衣に自らを等置し』ではなくて、『上衣を価値として自らに等置し』と訳すべきであることは、一見して明らかであると思う。にもかかわらず、両訳ともに、しかも両箇所ともに、逆の意味に訳出されているのはどうしたわけであろうか。」(久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』、岩波書店、1957年初版、59～60頁)

このように久留間は文法から誤訳を指摘したが、それだけではなくて誤訳によって見失われている事態についても次のように指摘している。

「このばあいには上衣の使用価値が——その自然形態が——リンネルにとってそのまま価値の姿になるのは、リンネルが上着を自らに等置することによって、上衣に価値物としての形態規定をあたえるからであり、上衣はかくしてあたえられた等価物としての定在においてはじめてリンネルの価値を表現するのである。」(久留間、『価値形態論と交換過程論』、64頁)

正しい訳だと、上着を価値として自らに等置するということになるから、この関係にあっては上着に価値物としての形態規定をあたえることが読み取れるが、誤訳にしたがって、上着に自分を等置するという読みなら、この形態規定が見失われるのである。

この久留間の指摘について、まずマルクス自身が商品語を翻訳した『資本論』第二版の箇所と比較対照することから始めよう。それは次のような事柄である。

「商品価値の分析が先にわれわれに語った一切のことを、リンネルが他の商品、上着をと交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るものである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語でその思いを打ち明ける。労働は人間的労働という抽象的屬性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用するかぎり、したがって価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの高尚な価値対称性は糊でごわごわしたリンネルの肉体とは違っているということを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであると言う。」(井上康、崎山政毅『マルクスと商品語』、21～2頁、『資本論』長谷部訳、河出書房新社、原典56頁、)

ここで「リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用するかぎり、」というように両者の関係を表現していることは、リンネルが上着に自分を等置しているのではなく、逆に、上着をリンネル自身に等置していることを示していて、久留間の誤訳批判が正しいことを証明している。長谷部訳「リンネルが価値としての上衣に自らを等置し」ではなくて『上

衣を自らに等置』と訳すべき」であったのだ。

見られるように、マルクスの商品語の翻訳では上着が主語になっている。リンネルは上着を主体として扱っている。このような扱いは思考の論理では表現できないから、長谷部や岡崎は、この正訳を捨てて誤訳を採用したのではないか（論理的に筋が通らない）。つまりデカルト的自我は、自我以外の他者を客体、対象、環境としてしか位置づけられない。独我論は論理自体に内在しているのだ。

では久留間が指摘した誤訳をただすと第Ⅰ形態の意味はどうなるだろうか。さらに、今村が市民社会に生きる人の思考様式であると指摘しているこの独我論がどこから生み出されるのか。項を改めて問題を整理しよう。

4. 第Ⅰ形態の新しい読み

まず結論的命題を先に述べておこう。第Ⅰ形態が、相手を主体とみなす相互主体的関係だとすれば、商品経済においては、人格は商品という事物（物象）に自らの意志を預けることで貨幣を生成し、商品所有者同士の間での人格的独立、ただし事物的（物象的）依存関係に支えられたそれ、を得たのではないのか。植村の発想を借りるなら、市場では、人びとは、倫理的関係を商品に預けて論理だけで生きていけるようになったのではないか。中世の共同体的規制（倫理的関係）からの解放、金銭で解決する「合理的」な方法へのあこがれ、これはこのように商品からの貨幣の生成をとらえるとよくわかるのではないか。

私は80年代初めに、資本の告発にとどまらず、商品の悪を解明しようという故八木俊樹の発案に沿って思考し、とりあえずはその悪を商品という事物（物象）による意志支配であるとみなしてきた。

今村の『暴力のオントロジー』は優れた本だが、『資本論』初版本文価値形態論からの引用が、誤訳されたものを無批判的に使って（久留間の指摘があるにもかかわらず）解釈が逆になっている。そして、価値形態論で第三項排除の仕組みを説いているが、商品の価値形態に第三項排除の暴力があるというのなら、その暴力は市民社会にとって宿命的で無効にはできなくなるのではなかろうか。

第Ⅰ形態は、今村の言うような、相対的価値形態にある商品が、自分を等価形態にある商品に等置していることだから、等価形態にある商品に暴力を加えている、ということではない。誤訳を改めれば、相対的価値形態にある商品は、等価形態にある商品を自分に等置するわけだから、暴力ではなくて相手を立てていることになる。つまり受動的な位置にある等価形態を主体として扱っていて、レヴィナスの顔を連想させる。第Ⅰ形態は論理的関係ではなくて相手を立てる倫理的関係となっていて、歓待の思想が語られているのではないか。

商品の価値形態に歓待の倫理があり、人間は商品に意志を宿すことで、物象的依存関係に支えられて人格的独立を実現するのだが、倫理を商品に預けて「われ思うゆえにわれあり」、というデカルトの自我となり、独我論のとりことなる。市民社会での暴力は、倫理を商品に預け、人格はもっぱら論理的独我論者としてあらわれている結果として見れないか。

このようにみると初版の第Ⅳ形態についても新しい発見ができる。これは本来は、交換過程論で貨幣を生成してしまうことの証明のための、貨幣形態不可能論であるが、逆に読めば、万人が貨幣を創造できる地域通貨の成立としても読め、そうするとこれは貨幣をつくらず、迂回して本能的共同行為を不必要とする交易を示唆していると読める。以上は、まだ覚書であり、今後さまざまな方向に向けて議論を発展させていかねばならないが、今回は基盤的コミュニズムとの関係で第Ⅳ形態の新しい読みを述べるにとどめておこう。

5. 第Ⅳ形態の新しい読み

このように、第Ⅰ形態の新しい読みが開示され、その内容が相手を主体とみなす相互主体関係であるとすれば、それは反照の弁証法でしか把握できない関係であり、それはすでにふれたように、レヴィナスが提起した、論理の彼方にある倫理的関係ではないのか、という疑惑がわいている。そこには人格の独立はないのだから、グレーバーの言う基盤的コミュニズ

ムではないかとしてみるることができるのではなからうか。

商品の第Ⅰ形態に基盤的コミュニズムが内包されているとすれば、そこには事物の相互依存関係がある。第Ⅱ形態はその拡張として位置づけられ、第Ⅲ形態は貨幣形態の萌芽であり、第Ⅳ形態は再び基盤的コミュニズムを内包する。そしてマルクスはそうはしなかったが、第Ⅳ形態を逆転した第Ⅵ形態を想定すれば、それは第Ⅳ形態から貨幣生成に向かう市民社会形成とは別のオルタナティブな社会の萌芽として読めるのではないのか。

このような読みから、交換過程での貨幣生成についても新しい読みが付け加わってくる。貨幣の生成とは事物（物象）としての商品に意志支配され、無意識のうちでの本能的共同行為に参加することによってなしとげられるのであるが、その際に出現する人格の独立とは、人類のそれまでの倫理的な社会関係を事物に収容したものではないのか。その結果人間は個人となり、自由となりデカルト的コギトが一般化したのだ。

例えば、ギリシャの奴隷制が労働を担い、アゴラ（市場）と市民の自由が実現したが、市民は公務員で、軍事、行政、議会、裁判所で働いて俸給を硬貨で得てアゴラで生活必需品を買った。支配者であった貴族たちは自分たちの奴隷付きの荘園で生活基盤を持ち、特権階級を形成していた。

現代では、商品が基盤的コミュニズムを内包しているので、それに意志を預けた人間は、独立した個人として孤立し、基盤的コミュニズムは、労働過程、家族に見られる。

もし商品の第Ⅰ形態が基盤的コミュニズムを内包しているのなら、それを脱事物化することが問われている。

改めて貨幣とは何かを知るために価値形態論に立ち返ろう。

第Ⅰ形態 基礎的コミュニズム

第Ⅱ形態 その拡張

第Ⅲ形態 貨幣形態の萌芽

第Ⅳ形態 貨幣形態の萌芽でもあり、コミュニズムの萌芽でもある

これを貨幣の生まれない交易とすると過渡期の経済となる。労働に応じた分配。地域通貨はこの過渡的形ではないか。各人が貨幣を創造できる。自分の生産物ですべての他人の生産物を買える。だが現実には労働生産物を商品とすることで第Ⅳ形態は交換過程を通して実現しえない。

第Ⅴ形態 交換過程を経て貨幣形態の生成

貨幣が生まれない交易へと第Ⅳ形態は移行できるか。これはいかにして可能か。これが現在の革命（プログラム）の課題。

第Ⅵ形態 第Ⅳ形態を転倒させたもの

万人が貨幣を創造する地域通貨導入から労働に応じた分配へ

付図：商品という社会的象形文字を読む（最新版）

2019年1月20日

はじめに

今から、『資本論』初本文価値形態論を素材にして、商品という社会的象形文字を読む作業に入ります。別に『資本論』を読んでいなくても構いません。商品や貨幣（お金）は、私たちが毎日毎時つきあっているものであり、日常でありふれたものです。ただ、商品を社会的象形文字として読むには、いくつかの約束事があります。商品を社会的象形文字として解読するとは、言いかえれば、社会の中の市場に存在している商品と貨幣の関係を、文字として読むということです。その際に、貨幣も商品であり、したがって、まずは、貨幣が登場しない商品の関係を考えます。これは、例えば、1万円のシャツ5枚は、5万円の上着と同じ価格ですから、5枚のシャツ＝一着の上着、と表現できますね。これが商品の価値形態の基本形です。

価値形態論を始めて解明した、マルクスの、『資本論』初本文の価値形態には、四つの種類があります。私は、この四つの価値形態に、新しく三つの形態を付け加えました。初本文価値形態論では、貨幣形態は登場しないですから、交換過程での、人格が介在することによって生成される貨幣の生成によって成立する、貨幣形態を第Ⅴ形態としました。そして、さらに、私のアイデアである、第Ⅳ形態を転倒したものを、第Ⅵ形態とします。最後に、第Ⅵ形態が、その進化過程で商品交換をのりこえた形を、第Ⅶ形態としました。再度確認しますが、マルクスが述べているのは第Ⅳ形態までで、あとの三つの形態は私が付け加えたものです。では、この七つの価値形態に即して説明していきましょう。その際、『資本論』で書かれている内容とはあまり重複しないかたちで、単に文字を読むという観点から考察します。

A) 第Ⅰ形態（簡単な価値形態）

X 量の商品 A = Y 量の商品 B

先に述べたように、価値形態とは商品と商品との関係をあらわしたものです。等式を使っていますが、数学とは違って、等式の両辺にはそれぞれ意味があります。この場合、商品 A が自分の価値を商品 B で表現しているということで、左辺は相対的価値形態、右辺は等価形態と名付けられています。左辺の商品 A は、自分の価値を右辺の商品 B で表現している、ということなのです。平たく言えば、商品 A の価値は商品 B に値する、ということです。

ここでの問題は、商品 A が、自分に商品 B を等置しているのか、それとも、自分を商品 B に等置しているのか、ということです。後者だと、商品 A は商品 B を同等化しているということで分かりやすいし、それはこの等式を、主語＝述語という論理式として読んでいることになります。しかし、ここではそうではなくて、商品 A は、自分に商品 B を等置しているのです。いわば相手に判断をゆだねているのですね。つまり自分だけでなく、相手も主体として扱っているのです。

このところは、今村仁司が『暴力のオントロジー』（勁草書房、1982年）で、商品 A が、自分を商品 B に等置していると読んで、これを暴力の始まりとみなしました。それは、初版の誤訳に基づくもので、商品 A は、自分を商品 B に等置しているのではなくて、逆に自分に商品 B を等置しているのだということは、私には、80年代からわかっていました。ところが、相手を主体として扱っているという理解には至らず、批判できないでいました。しかし、第Ⅰ形態が、自分の価値を相手に判断してもらうという関係、つまり相手を歓待する作法がそこにはあることが分かれば、ここは暴力の始まりではなくて分かち合いの関係なのです。このことに気づいたのも昨年末でした。今村説はおかしいと思っていましたが、30年ぶりに批判できました。

私は、この二つの読みの違いを言葉で表現しようと努力してきました。しかし、これは、

無理な試みだったことが分かりました。商品Aが、自分を商品Bに等置する、という読みは、二つの商品のことなる使用価値が、同じものだという判断が含まれています。この判断は端的に誤りなんですね。他方、商品Aが、自分に商品Bを等置している、という読みの場合は、異なる二つの使用価値とは別の共通なものをこの等式は表現しているのです。

マルクスは第Ⅰ形態の分析では、この共通なもの、人間労働が、二つの商品の関係でどのように抽象化されていくかという事態抽象の仕組みを明らかにしているのですが、それは、実は、主体と主体との反照関係の分析でした。ここでは、読み方の違いを指摘して置くにとどめますが、

B) 第Ⅱ形態（全体的な価値形態）

$$\begin{aligned} X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \end{aligned}$$

ここでは、商品Aは、さまざまな商品を主体として扱っています。そうすることで商品Aの価値が、さまざまな具体的労働で表現されていることになり、それらの労働の違いが、この事物相互の関係で抽象されて、商品Aが、この関係では、共通な抽象的人間労働として表示されていることが読み取れます。

つまり、第Ⅰ形態の分析では、思考によって事態抽象の仕組みが解明されましたが、ここでは、商品を社会的象形文字として読むことで、事態抽象という仕組みが働いていることが分かるのです。

C) 第Ⅲ形態（一般的な価値形態）

$$\left. \begin{aligned} Y \text{ 量の商品 B} &= \\ Z \text{ 量の商品 C} &= \\ W \text{ 量の商品 D} &= \\ \dots &= \end{aligned} \right\} X \text{ 量の商品 A} =$$

第Ⅱ形態を逆から見れば、この第Ⅲ形態となります。ここでは、商品Aは、他のすべての商品の等価物であり、したがって、諸商品の一般的な等価物として表示されています。一般的等価物としての商品Aの表示は、商品A以外のすべての商品が、共同して商品Aを主体として扱っていることの結果です。また、ここで相対的価値形態にある諸商品は、商品Aを仲立ちにして、それぞれがつながり合えます。ここで諸商品は始めて、社会に通用する形態を獲得したのでした。『資本論』現行版の価値形態論では、次の第Ⅳ形態は、一般的等価物が、さまざまな商品から金に固定された、貨幣形態となっています。貨幣は、人格の関与のない価値形態論の領域で生成するという誤解が生じます。ところが、初版本文には、他には見られない、次の第Ⅳ形態が続きます。

D) 第Ⅳ形態（初版本文第Ⅳ形態）

$$\begin{aligned} X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \\ Y \text{ 量の商品 B} &= X \text{ 量の商品 A} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \end{aligned}$$

$$\begin{array}{l}
 = \dots \dots \dots \\
 Z \text{ 量の商品 C} = X \text{ 量の商品 A} \\
 = Y \text{ 量の商品 B} \\
 = W \text{ 量の商品 D} \\
 = \dots \dots \dots
 \end{array}$$

この第IV形態は、『資本論』初本文価値形態論にだけ登場しています。この社会的象形文字は、所有者が登場しない、商品の価値形態論の領域だけでは、貨幣は生成されず、商品の交換過程での人格（商品所有者）の登場を待つことで、貨幣が生成されるということを表示しています。つまり、すべての商品が、相手を主体として扱くと、商品世界の統一的秩序は生まれない、という意味を表現しているのです。

E) 第V形態（交換過程での貨幣生成）

$$\begin{array}{l}
 X \text{ 量の商品 A} \\
 Y \text{ 量の商品 B} \\
 Z \text{ 量の商品 C} \\
 \dots \dots \dots
 \end{array}
 = \left. \begin{array}{l} = \\ = \\ = \\ = \end{array} \right\} V \text{ 量の金}$$

第二章 交換過程、でマルクスは商品所有者を登場させます。この人格は、「自分の意志がそれらの物においてある定在をもつところの諸人格」（初版交換過程）です。交換過程に登場する商品所有者は、第IV形態を受けて、考える前に行動して、無意識のうちでの本能的共同行為に参加し、そのことで貨幣を生成します。人格が介在しなければ貨幣は生まれることはないのです。この点が、現行版『資本論』では隠されています。

この、初版の貨幣生成論によれば、たとえば、トヨタが車に100万円の価格をつければ、その裏にトヨタがまったく自覚せずに、金を貨幣とする無意識のうちでの本能的共同行為に、参加していることが分かります。つまり、貨幣は、生産物が商品として交換過程で価格をつけて送り出されるつど、生成されているのです。ここから、貨幣を生成しないような人間の関与の仕方、を構想できるのではないのでしょうか。私が付け加えた次の二つの形態はその素材です。

F) 第VI形態（だれもが貨幣形態になりうる＝地域通貨）

$$\begin{array}{l}
 \text{一枚の上着} \\
 \text{一〇ポンドの茶} \\
 \text{四ポンドのコーヒー} \\
 \dots \dots \dots \\
 \text{二〇エレルのリンネル} \\
 \text{一〇ポンドの茶} \\
 \text{四ポンドのコーヒー} \\
 \dots \dots \dots \\
 \text{二〇エレルのリンネル} \\
 \text{一枚の上着} \\
 \text{四ポンドのコーヒー} \\
 \dots \dots \dots
 \end{array}
 = \left. \begin{array}{l} = \\ = \\ = \\ = \\ = \\ = \\ = \\ = \\ = \\ = \\ = \\ = \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{二〇エレルのリンネル} \\ \\ \\ \\ \text{一着の上着} \\ \\ \\ \text{一〇ポンドの茶} \end{array}$$

現実には、第IV形態の矛盾は、交換過程での、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって、貨幣生成の運動として、解決されています。しかし、第IV形態は、貨幣を生成しないもう一つの経済を暗示している、と読みとれないのでしょうか。この観点から、第IV形態を転倒させて第VI形態を描いてみましょう。この形態で等価形態にある商品の所

有者たちは、どのような社会的関係をもつのでしょうか。

その一つが地域通貨です。地域通貨の場合は、自分の生産物で、他の人の商品が買えますが、それは地域通貨のメンバーが、共同体を構成しているからです。ある意味で、地域通貨は共同体内部の人々が、それぞれ貨幣を創造することで成立している、と見る事ができることが分かります。

また、ここでは、主体相互が分かち合える関係の萌芽が、作り出されていると想定できないでしょうか。主体相互の分かち合いが可能な社会システムが、この第VI形態で示唆されていて、それへの移行が展望できるのではないのでしょうか。というのも、この形態は資本主義の下でも実現可能です。そしてこの形態の占める領域が拡大していけば、現在の主流である貨幣形態の占める役割が狭まっていくでしょう。

また、金融インフラがIT技術の発展で、変貌してキャッシュレスが実現しつつあり、スマホが金融機関の端末として、利用されるようになってきています。また、アマゾンなどの大企業が発行するクーポンなど、銀行券に代わるツールが多様になってきています。まだまだ研究不足ですが、金融インフラの発展から新しい動きが始まりそうです。

G) 第VII形態 (貨幣形態をつくらない=労働に応じた分配)

$$\left. \begin{array}{l} Y \text{ 量の財 B} \\ Z \text{ 量の財 C} \\ W \text{ 量の財 D} \\ \dots \end{array} \right\} = X \text{ 量の労働 A}$$

$$\left. \begin{array}{l} X \text{ 量の財 A} \\ Z \text{ 量の財 C} \\ W \text{ 量の財 D} \\ \dots \end{array} \right\} = Y \text{ 量の労働 B}$$

$$\left. \begin{array}{l} X \text{ 量の財 A} \\ Y \text{ 量の財 B} \\ W \text{ 量の財 D} \\ \dots \end{array} \right\} = Z \text{ 量の労働 C}$$

第IV形態を転倒させて第VI形態を描きましたが、これはまだ商品の関係でした。さらに、それを社会化された労働の関係として、第VII形態をたててみましょう。

社会化された労働とは、共同体のメンバーになることで実現できます。そうすると、この形態は、マルクスが、 Kommunismusの低い段階の分配様式として述べた、「労働に応じた分配」を表示していることが分かります。等価形態の位置にある、各種の労働提供者たちは、社会の総生産物から社会の維持に必要な諸経費(6項目)を差し引いた後の残りを、各人が社会に提供した労働に応じて、受け取ることができるのです。つまり、この第VI形態は、市場社会主義が、市場をのりこえる構想を描き出す際の素材としての意義、をもっているのではないのでしょうか。かつての計画経済に代わる、次のシステムへの移行の構想を、ここに読み取ることができます。ここでは、一般的等価物は、ある特定の一商品ではなくて、すべての種類の労働提供が、そのポジションを得るということですが、それは、社会的労働の成立の特質であり、社会の構成員が、それぞれ主体として財を分かち合える関係の始まりを意味します。

しかも、この第VII形態は、資本主義社会の胎内で産み出される第VI形態から、金融インフラの変革によって生成してくるだろうし、また、中国のように、国家が共産党の支配のもとにある社会では、この変革を容易にできるでしょう。

いずれにしても、第IV形態を転倒した第VI形態の形と、さらにそれを進化させた第VII形態

まで含めたこの社会的象形文字の図一枚で、貨幣の生成と、貨幣生成のない社会の富の仕組みが表現できます。伝統的な左翼の革命論である、権力奪取の発想からは、現実に存在している、市場社会主義から Kommunismus への移行を構想できません。マルクスの時代には、市場社会主義は存在しておらず、またその構想もなかったのですが、しかし、『資本論』初版本文価値形態論には、その処方箋が描かれていたこととなります。いまこそ、この処方箋を具体化していく時ではないでしょうか。